

られました。一度通った道は後に戻らず、右回りはしないことが特徴です。また、住矢の笠の中に入ると病気が良くなるという言い伝えもあります。



南新町のお宿。傘針上屋に乗る人形たち

闘雞神社

闘雞神社は通称「権現さん」と呼ばれ、御祭神の中には熊野三山（熊野本宮、熊野那智、熊野速玉大社）も勧請されています。三山の別宮的存在で熊野信仰の一翼も担っていました。

名前の由来は『平家物語』壇ノ浦合戦の故事によるものと言われています。その昔、武蔵坊弁慶の父である熊野別当・湛増は源氏と平氏の両方から援軍を要請されました。どちらに味方をす

るか決めかねた湛増は神社の本殿前で赤を平氏、白を源氏に見立て紅白の鶏を7回闘わせました。全て白が勝利したため源氏に味方したと言われています。境内ではこの様子を模した湛増と弁慶像が置かれています。

ちなみに南方熊楠の妻・松枝は、闘雞神社宮司の四女。熊楠ゆかりの場所としても有名です。



「浦安の舞」



氏子代表が袴姿で勢揃い

高山寺

田辺の市街地や神島を一望できる高台にある高山寺。弘法大師が開いたと言われるお寺に、熊楠は眠っています。

生前、熊楠は寺苑の一角にあった日吉神社の境内から数多くの植物を採集し、研究に役立てていました。明治41年（1908年）、高山寺に隣接していた猿神社が合祀されるのに伴い、ご神木も伐採されてしまいました。これに激怒した熊楠は神社合祀反対運動に積極的に携わるようになりました。



熊楠の墓の前で説明するボランティアガイドの山本享一さん

南方熊楠顕彰館

暁の祭典を鑑賞した後に訪れたのが、南方熊楠顕彰館です。この施設は南方邸に残された蔵書

や資料の保存、及び熊楠に関する研究を推進・活用するために立てられました。館内には彼の蔵書や資料の閲覧はもちろん、学習室も完備されており、熊楠の生涯を学ぶことができます。

また、顕彰館の隣には、熊楠が晩年を過ごした自宅が当時のままの姿で残されています。熊楠の娘、文枝さんの世話をされた方に解説いただきながら、熊楠の研究に対するひさたむきさを感じることができました。

熊野古道が世界遺産に認定され、今年で10年が経ちました。現

在、この地に多くの自然が残されているのは、熊楠の努力によるものです。南紀白浜で生まれた巨人・南方熊楠。その信念はいまもなお、受け継がれています。



熊楠の部屋

エコロジー思想の先駆者

南方熊楠 1867~1941年



「てんぎゃん」と呼ばれた幼少時代

和歌山県城下の金物商の次男として生まれた南方熊楠。学校の授業に出ず、山に入り植物採集に明け暮れていたことから「てんぎゃん（天狗）」と呼ばれた。

東京大学を退学し、海外へ

明治17年。熊楠は大学予備門（現在の東京大学）に入学したものの、2年後に退学。西洋の最新の科学を学ぶためにアメリカへ。その6年後にイギリスへ渡る。このころ科学雑誌『ネイチャー』に論文の投稿を始めた。海外での生活は明治33年まで続いた。

神社合祀運動に反対

帰国後、那智に移り住んだ熊楠は、原生林が残る熊野の森で自らの研究に没頭。明治37年に田辺に移り住んだ熊楠は近郊の山々で植物調査を行う。明治39年、研究対象の森林が伐採されることになったのを皮切りに神仏合祀運動に反対の姿勢を示す。